

コーパスを利用したナガラ文の使用分析

—テとナガラの置き換えの可否を中心に—

和田 礼子

1. はじめに

日本語教育で使われている初級の教科書を見ると、単文から複文へ、段階的に学習が進むよう配置されており、付帯状況ナガラは初級の中盤から後半にかけて提示される学習項目である。ナガラには逆接の用法もあるが、これは初級では提示されず、中級以降の学習項目と位置づけられている。

庵他(2000)は(1)(2)のような文を付帯状況のナガラとしている。

- (1) 彼はいつもテレビを見ながらごはんを食べる。
- (2) 辞書を引きながら英語を読むのは疲れます。

庵他(2000)の付帯状況ナガラに関する記述をまとめると次のようになる。

PながらQについて

- ① ある主体が動作Qを行うときに、同時に別の動作Pを行うことを表す。
- ② Pは時間的な幅のある動作であることが必要。
- ③ 二つの動作のうち主な動作は普通Qで、Pは付帯的な動作である。
- ④ 「PながらQ」を意味を変えずに「PてQ」に置き換えることはできない

④については(3)(4)の文を例としてあげている。

- (3) a. テレビを見ながらごはんを食べました。
b. テレビを見てごはんを食べました。
- (4) a. 資料を使いながら勉強した。
b. 資料を使って勉強した。

(3) について、aは付帯状況で、「見る」と「食べる」が同時に行われてい

るが、bは「見た」そして「食べた」のように、動作が継起的に行われたことを意味する。

(4) について庵他 (2000) は、bは手段であり、aとbは同じ意味にならないという。

一方、川越 (2002) はテに置き換えられるナガラと置き換えられないナガラがあると述べている⁽¹⁾。(川越 2002p.52)

(5) ラジオで音楽を聞きながら、日本語の勉強をした。

≠ (5)' ラジオで音楽を聞いて、日本語の勉強をした。

(6) 発音のテープを聞きながら、日本語の勉強をした。

= (6)' 発音のテープを聞いて、日本語の勉強をした。

(5) は「聞きながら」と「勉強をした」が同じ時間に行われているが、(5)' は「聞いたあと勉強した」という事態を表しており、二つの動作は継行的に行われたことになる。一方(6)と(6)'では、二つの動作は同じ時間に行われていると解釈でき、置き換えが可能だとしている。川越(2002)では(6)'に手段の意味が含意されているか否かについては言及していない。

また、ナガラとテの置き換えについては、吉永(2008)が(7)のような例文をあげ、置き換えることができないと指摘している。

(7) {歩いテ/*歩きナガラ} うちへ帰る。

(4) a、bは「手段」か否かといった違いはあっても、それぞれが正用として認識されるのに対して、(7)の「歩きナガラ」は許容量が低い。

このようにナガラとテを置き換えた場合、「主節と従属節の時間関係が変わるものと、変わらないもの」、「時間関係は同じでも、意味に違いが現れるもの」、そして「置き換えられないもの」があることがわかる。これにはナガラ節の動詞の種類や、文脈などの条件が関わっていると考えられる。

本稿ではこのようなナガラとテの置き換えについて考察する。2節ではテ節に関する先行研究を概観し、3節では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られるナガラの使用例と、テへの置き換えの可否について検証する。そして、4節では『日本語学習者作文コーパス』に見られる、日本語学習者の誤用例と、それに対する日本語教師の添削を中心に分析を進める。

2. 先行研究

2-1 付帯状況ナガラについて

森田（1980）、和田（1998）、グループジャマシィ（1998）ではナガラの用法には同時と逆接があるとされている⁽²⁾。一方、益岡・田窪（1989）、三宅（1999）、松田（2000）、川越（2002）、日本語記述文法研究会（2008）では、ナガラを「付帯状況」と「逆接」とに分類している。

付帯状況という用語についてここで確認しておきたい。付帯状況について日本語記述文法研究会（2008）、益岡・田窪（1989）は次のように定義している。

- ・主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す。（日本語記述文法研究会 2008 p.248）
- ・付帯状況を表す副詞節は、ある動作と同時並行的に行われている付帯的な動作や状態を述べるのに使われる。（益岡・田窪 1989 p.175）

「付帯状況」には同時性という要素が含まれていること、また、「付帯状況」も「逆接」も、主節と従属節の意味関係を表すことから、本稿ではナガラの用法を「付帯状況」と「逆接」の二つに分類するという立場をとる。

2-2 ナガラ節のアスペクト

ナガラには付帯状況のナガラと逆接のナガラがあるが、本稿では付帯状況のナガラを分析の対象とする。

和田（1998）ではナガラ節のアスペクト的な意味が継続であれば同時進行、パーフェクトであれば逆接を表すと指摘している。和田（1998）で「同時進行」とされているナガラは、本論では付帯状況と読み替えて論を進める。

工藤（1995）は、アスペクトは「運動内部の時間的展開の姿をとらえる」ものであり、「複数の出来事の時間関係〈タクシス〉を表し分ける」というテクスト的機能を果たすと指摘している。これをふまえ、和田（1998）の主張は、「アスペクト的な意味において、付帯状況のナガラ節は運動の継続的局面を捉え、主節との時間関係（タクシス）は〈同時〉である」と言い換えることができる。

庵他（2000）はナガラ節は「時間的な幅のある動作であることが必要」としていた。三宅（1999）も「ナガラ節は、その節中に生起する述語が、主語の述語より時間幅のある[過程]を持つと解釈される場合に、付帯状況文として成立する」(p.80)と述べている。運動の継続局面は[過程]をあらわし、

時間的な幅が必要であるが、これらの指摘は和田（1998）の主張と矛盾しない。[過程]をあらわし、時間的な幅が必要であるという特徴は、継続の局面がもつ特徴にそのまま、当てはめることができるからだ。

完成性が運動の始まりから終わりまでをひとまとまりの分割できないものとして捉えるのに対し、継続性は運動が継続している局面を捉える。この継続の局面は客観的時間の長短に関わらず、幅のあるものでなければならない。三宅（1999）で示された次のナガラ節のアスペクトは継続の局面である。

(8) a. 電話を切りながら、ため息を一つついた。(p.81)

b. ガードレールに接触しながら、こわごわ車を運転した。(p.80)

(8) a は、本来ならきわめて短い時間に完結する動作をスローモーションのように引き伸ばして動作継続の部分を取りだしている。(8) b は「接触する」という動きが何度も繰り返されているが、「くりかえし」は寺村（1984）が「点であるが、連続したものとして、線として解釈される」(p.128)と述べているように一続きの運動であると解釈され、その運動の継続という局面を表していると考えられる。

また、和田（1998）ではナガラ節が動作継続の局面ではなく、変化結果継続の局面を表す場合でも、付帯状況を表す例として「犬が大きな肉をくわえながら、橋を渡った」をあげている。結果状態ではなく、動作終了後、その状態を維持するためにエネルギーの供給が必要な場面であるという意味で、これを動的場面と呼び、このような場面では、ナガラ節が付帯状況を表すことを指摘している。

この「動的場面」という捉え方は、森山（1988）がいう[維持]の局面と同義であると考えられる。森山（1988）は持続的な動きの局面を「動きが運動として展開している期間＝過程」と「動きの結果が持続的である場合＝結果持続」,「動きの結果の保存が主体的に行われ、過程と結果持続の中間的なもの＝維持」と定義し、〈維持〉の局面をもつ動詞は「タママ・ナガラ」交替が可能であると述べている。

これらの先行研究をふまえ、付帯状況ナガラ節は動作継続の局面か、結果継続を維持する局面を表すという前提で、分析を進める。

2-3 ナガラとテの置き換え

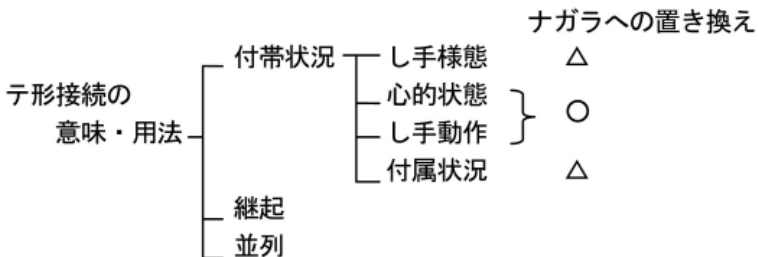
仁田（1995）はテ形接続の意味用法として、付帯状況、継起、並列の3

つの類型を抽出している。この中で、ナガラに置き換えが可能なのは、付帯状況のテ節である。付帯状況のテ節の特徴について、仁田（1995）は次のように述べている⁽³⁾。

- ・ <付帯状況>とはシテ節で表されている事象が、主節として表される事象の実現のされ方を限定・修飾するといったあり方で、主節と結びついている。
- ・ シテ節と主節の事象の主体は同一でなければならない。
- ・ シテ節の事象と主節の事象は、同じ時間の中に存していなければならない。

主節と従属節の意味関係や、同一主体、同時性という付帯状況テ節の特徴は付帯状況ナガラ節の特徴と共通している。

仁田（1995）は付帯状況についてさらに「し手様態」「心的状態」「し手動作」「付属状況」に下位分類している。この中でナガラに置き換えることができるのは「興奮して、呆然として、あわてて」など、心理作用を表す動詞によって構成される「心的状態」と、主体運動の動詞がテ節で繰り返しの事象を表す「し手動作」の用法である。仁田（1995）のテ形接続の意味用法と、ナガラへの置き換えの可否についてまとめると次のようになる。



以下、(9)～(20)の文例は仁田（1995）によるテ節例文⁽⁴⁾に筆者がナガラを加えたものである。特に断りのない場合、文法性の判断は筆者による。

(9) 小関さん、花村、月川の二人も、みな {呆然としテ／ナガラ} 神津さんの顔を見つめているばかり～ : 心的状態

(10) 1122 番の伝票を {ひらひらさせテ／ナガラ}、蒼ざめた技術員が言う。
：し手動作

(11) 家鴨は～忙しく足を {動かシテ／ナガラ}、上流のほうへ泳いでいった。
：し手動作

仁田 (1995) は「びくびくシテ、げげんな顔をシテ」のような心の動きを表す外的態度動作や、表情動作を「し手動作」と「心的状態」との中間に位置するものとして扱っており、これらはナガラとテの置き換えが可能である。

姿勢や着脱、携帯を表す動詞によって構成される「し手様態」の中には、「首をかしげる、目を伏せる」のように、ナガラに置き換えることができるものと、「着る、履く」のようにナガラに置き換えることのできないものがある。

(12) 「だって『～』と言って、首を {かしげテ／ナガラ}、私の顔をのぞきこむでしょう。いやだったわ」

(13) 私は汗で湿った服をそのまま {着テ／*ナガラ}、また《寮》に出かけていった。

(14) だがそのスリッパには、確かに私も見覚えがあった。～たしか昨夜も、彼女は、それを {はいテ／*はきナガラ}、部屋におったに違いない。

また、「首をかしげる」と同じ姿勢変化動詞でも「しゃがむ、立つ」は、置き換えることはできない。

このような現象は、テ節、ナガラ節動詞のアスペクト的特徴に起因する。「し手様態」のテ節は、「首をかしげて＝かしげた状態で」「湿った服をそのまま着て＝着た状態で」「スリッパをはいて＝はいた状態で」と言い表すことができ、テ節は結果状態が続いていることを表す。一方、ナガラ節が結果状態を表すのは、ナガラ節が結果状態の維持という要素を持つ動詞の場合に限られる。

森山 (1988) は維持の局面を持つ動詞は「タママ・ナガラ」交替が可能であるとしているが、「首をかしげタママ＝首をかしげナガラ」のようにタママとナガラの交代が可能な動詞、つまり [維持] の局面を持つ動詞はテとナガラの置き換えが可能であり、「着タママ≠着ナガラ」のように交替が不可能な動詞、つまり [維持] の局面を持たない動詞はテとナガラの置き換えも不可能になる。

森山 (1988) は「座る」は維持の局面を持ち、「タママ・ナガラ」交替が可能であるとしているが、これについては、日本語母語話者の間でも認識に

ずれがある。

和田(2013)では東京方言話者と、熊本方言話者、高知方言話者を対象に「座りナガラ」がどのような局面を表すと認識しているかについて調査を行っている。「座りながら」について、東京方言話者は「座った後」と捉えるのに対し、熊本方言話者、高知方言話者は「座った後」と「動作の最中」の両方の局面を捉えるという調査結果が報告されている。これは[維持]の局面をもつかどうかの判断は地域によって差があるということを意味している。また、「座る」は文脈の影響も強く受ける。

仁田(1995)は「座る」については(15)のような形では容認度が低いが、(16)のように、「ゆったり」のような副詞を付加すれば、変化後の姿勢維持に焦点が当てられ、容認度が上がるとしている。(文法性判断は仁田による)

(15) 太郎は {?? 座りナガラ/座ッテ} 弘と話していた。

(16) 太郎はゆったり座りナガラ弘と話していた。

このように[維持]の局面を持つ動詞の中には、どのような場面でも安定して維持の局面を取り出せるものと、文脈や地域語の影響をうけるものがあるようだ。

いずれにせよ、ここでは「し手様態」を表すテ節では、テ節の動詞が結果維持の局面をもつ動詞の場合にかぎり、ナガラに置き換えることができるということを指摘したい。

仁田(1995)は「付属状況」の用法として(17)～(20)のような例をあげている。(文法性判断は仁田による)

(17) (死んだ蜂は)～、たぶん泥に {まみれテ/ナガラ} どこかでじっとしていることだろう。

(18) 月光を {浴びテ/ナガラ} 家へと帰ってくる、この二人の、～乙女らの姿には～

(19) ズボンと靴をびしょびしょに {しテ/*ナガラ} 彼は立ちあがった。

(20) 次の部屋に弱い電灯を {つけテ/*ナガラ}、息子が眠っていた。

仁田(1995)は(17)(18)のテ節が主体の様態的あり方を表しているのに対し、(19)(20)は「主体の様態的あり方」の度合いが低くなっていると述べている。(17)(18)は主体の全身が「泥にまみれ」「月光をあび」ている状況を述べているのに対し、(19)(20)は「ズボンと靴」「電灯」といった、ヲ格名詞の変化結果が継続しているという状況を表す。このような点か

ら (19) (20) は「主体の様態的あり方」の度合いが低いとみなされている。

ナガラへの置き換えという観点から見ると、(17) (18) では置き換えができるが (19) (20) は置き換えができない。これは、(19) (20) のナガラ節の動詞「びしょびしょにする」「(電灯を) つける」が、[維持]の局面をもたないことが理由である。では、客体状態維持の局面を持つ動詞の場合はどうだろう。

森山 (1988) は客体状態の維持を表す動詞として「預ける、貸す、借りる」などをあげている。(21) (22) は、「荷物を預けた状態で」「土地を借りた状態で」といった意味になるが、テをナガラに置き換えることはできない。

(21) 荷物をクロークに {預けテ/*ナガラ} 食事する。

(22) 親戚から土地を {借りテ/*ナガラ} 米を作る。

(21) (22) は (19) (20) 同様主体の様態的あり方をあらわす度合いが低いと考えられ、この場合、ナガラを使うことはできない。これらのことから、付帯状況ナガラ節が表す [維持] の局面は、[主体状態維持] であり、[客体状態維持] ではないことがわかる。

以上、2 節では付帯状況テ節の下位分類を確認し、さらにナガラとテの置き換えの可否について、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴といった観点から概観した。また主節とナガラ節、テ節の意味関係、つまり主体の様態的あり方の度合いといった要素についても確認した。

次節では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) にみられるナガラの使用状況と、テへの置き換えについて考察する。

3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られるナガラの使用状況

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスで、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルからサンプルを抽出している。本稿では BCCWJ 中のサブコーパス: 「図書館書籍」に使用されているナガラを抽出し、テに置き換えられるかどうかについて調べた。BCCWJ: 「図書館書籍」は 1986 ~ 2005 年に発行され、都内 13 自治体以上の図書館で共通に収蔵されている書籍から無作為抽出されたデータである。

BCCWJ: 「図書館書籍」に使われていたナガラの全使用例は 1152 例だった。うち、「ながらも」が 69 例、「名詞、形容詞+ナガラ」が 69 例だった。また、

ナガラ節のアスペクト的特徴がパーフェクトである、逆接のナガラは98例だった。本稿では、これらは分析の対象から除外し、「動詞+ナガラ」で付帯状況を表すナガラ節、916例について考察を進める。

付帯状況を表す916例のナガラのうち、テに置き換えても、表す事態が同じであると判断できる例は205例あった。もっとも多いのは主体の表情を表す用法で、45例あった。これは仁田(1995)が置き換え可能としている「心的状態」にあたる用法である。この用法が多いのは、用例を採取したコーパスに小説が多く含まれていることが要因であると考えられるが、違和感なく置き換えができる用法の典型例と考えてよいだろう。(以下、BCCWJから取り出した例文の末尾には(B)を付した)

(23) 柳沢はジャストに現れて、にこにこしナガラ片手をあげ、親指をフロントに向けて曲げて見せた。(B)

(24) 学生たちは、目をまるくしナガラ、いっしょうけんめいノートをとりました。(B)

(25) そうしたら、やっと息子は泣きナガラ話してくれました。(B)

「泣きナガラ」「笑いナガラ」は特に使用例が多い。他に表情を表すものには「にやにやする、微笑する、冷笑を浮かべる、目をギラギラさせる」などがあった。

次に使用例が多いのは「うつむく、(首を)かしげる、もたれる、見下ろす、(身を)よせる、(顔を)向ける」など、姿勢を表す動詞+ナガラで、28例あった。これは仁田(1995)では「し手様態」と呼ばれるもので、次のような姿勢を表すナガラはテに置き換えることができる。

(26) しばらく俊市は窓枠に頬づえをつきナガラ戦闘をぼんやりとながめていたが、～(B)

(27) 馬方ふうの男は首をかしげナガラ出ていった。(B)

(28) 「ぼくを塾へつれてって。足がないんだ。」男の子は、細い声で、うつむきナガラいった。(B)

「見上げる」のようなナガラ節が主体変化を表す動詞は、主節の動詞によっては違和感なくテに置き換えられる場合と、そうでない場合とがある。

(29) 通りすぎてゆく夏の夜空を見上げナガラ、俺はふと考えた。(B)

(30) マーイヤは、オオタカの巣を見上げナガラ、ふっと思った。(B)

(29)の「見上げナガラ」は「見上げテ」に置き換えることができる。「ふと」

がなければ、さらに違和感なく置き換えることができる。一方、(30)の「見上げナガラ」を「見上げて」に置き換えると、「見上げて、そして、ふッと」のような継起読みが可能になる。これは「ふッと」が非常に短い時間で成立する事柄であることが理由だろう。

一方、「夜空を見上げナガラ考えた」の場合、「考えている」時の主体の状態が「夜空を見上げている」と解釈される。「ふッと」より「考えた」のほうが、時間幅が長いと捉えられやすいため、このような解釈が可能となる。

ナガラ節が反復動作を表す次のような文もテに置き換えることができる。これは仁田(1995)では「し手動作」に区分される用法である。

(31) 自然を一つ一つ味わいナガラ、毎日を、一刻を楽しく過ごせ。(B)

(32) スリップ・リング (slip ring) スリップ・リングはブラシと接触しナガラ、フィールド (ロータ) の励磁電流の授受を行なう部分で、ロータ・シャフトに絶縁材を介して嵌入されている。(B)

(33) 後水尾院はいろいろの人を招きナガラ、さらに山荘の充実につとめた。(B)

ところで、テに置き換えられるナガラには次のようなものもある。

(34) とともに食卓を囲み、目を見ナガラ話す習慣があれば、親ならば子どものちょっとした変化に気づくでしょう。(B)

(35) ここで泣いたら私の負けだ、次にはもっと苦しい目に遭わされる。そう思って、相手の目を見ナガラ死に物狂いで笑ってやりました。(B)

「見る」はテ節では、継起を表すこともできるが、(34) (35) のナガラをテに置き換えると、継起ではなく付帯状況を表し、主節とテ節のタクシスは同時である。(34)「目を見テ話す」(35)「目を見テ笑う」の他、「顔を見テ話す」「窓の外を見テ話す／言う」などでは、「見る」動作をとりあげているというより、「話す・笑う・言う」という主節動作が行われる際に、「顔を合わせる」「目をそらさない」といった姿勢や態度を表している。

一方次のような文で、ナガラは付帯状況として自然だが、テはこの場合、継起となり、付帯状況の意味にはなりにくい。

(36) 家族の顔を {見ナガラ／?? 見て} 食事する。

この文は、(37) のような反復の文脈があれば、やや、許容度が上がるが、

この場合、姿勢や態度といった意味合いではなく、「見る」という具体的な動作が反復されることで、継続の局面となり、付帯状況の意味となる。

(37) 家族の顔をチラチラ {見ナガラ／見て} 食事する。

以上のことから、(34) (35) のような用法は「(人に対して) 話す／言う／笑う」のような動作を行う際、どこを向いているのかといったことを表す表現の一つであると考えられる。

以上、3節ではBCCWJに見られた、テに置き換え可能なナガラの使用例を見た。次の4節では学習者の作文コーパスに見られるナガラの使用例と、誤用について分析する。

4. 『日本語学習者作文コーパス』に見られるナガラの使用例

4-1 『日本語学習者作文コーパス』の概要とナガラ使用数

『日本語学習者作文コーパス』(以後、「作文コーパス」とする)とは日本語学習者が書いた作文をコーパス化したものである。これは日本語学習者304名(初級～上級、中国語母語話者144人、韓国語母語話者160人)が書いた作文と、その作文に加えられた添削例がデータ化されており、ウェブブラウザで検索できる。検索は、形態素単位あるいは文字列で行うことができ、誤用のタイプは文字、文法、文体に分けられている。このコーパスを利用して、日本語学習者のナガラの使用例と、それがどう添削されたかを分析する。

この「作文コーパス」に収められた作文のテーマは、「外国語が上手になる方法について」と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」で、ナガラの使用例は156例あり、誤用例は32例だった。表1はナガラの使用数と、正用、誤用の割合をまとめたものである。()内の%は使用例に対する割合である。

母語別に見ると、ナガラの使用例は韓国語母語話者に多く、誤用の割合も韓国語母語話者に多い。坂口、鄭(2006)では中国語・韓国語を母語とする日本語学習者のナガラ使用について分析しており、「作文コーパス」同様、使用数、誤用の割合ともに、韓国語母語話者が中国語母語話者より多かったと報告している⁽⁵⁾。

ところで、「作文コーパス」には誤用に対してどのように修正されたかといった修正例も含まれているが、指摘されている誤用例以外にも誤用と思わ

れるナガラが散見される。誤用は、学習者のレベルや発話意図などを考慮して修正されるため、教師によって修正の内容が異なることもある。本稿では、誤用として修正を加えられたもの以外でも、問題があると思われる使用については分析の対象とする。

表1 『日本語学習者作文コーパス』に見られる“ナガラ”の使用数

	母語別	中国語	韓国語	合計
初級	使用例	5	14	19
	正用	4 (80%)	10 (71%)	14 (74%)
	誤用	1 (20%)	4 (29%)	5 (26%)
中級	使用例	27	52	79
	正用	23 (85%)	38 (73%)	61 (77%)
	誤用	4 (15%)	14 (27%)	18 (23%)
上級	使用例	9	49	58
	正用	7 (78%)	42 (86%)	49 (84%)
	誤用	2 (22%)	7 (14%)	9 (16%)
合計	使用例	41	115	156
	正用	34 (83%)	90 (78%)	124 (79%)
	誤用	7 (17%)	25 (22%)	32 (21%)

ナガラとテの置き換えの可否について仁田(1995)は、テ節、ナガラ節動詞のアスペクト的特徴を中心に分析しているが、本節ではこれに加え、語用論的視点からの分析も試みる。

4-2 ナガラの誤用例：ウチニへの修正

「作文コーパス」には次のような誤用例があった。(→)は「作文コーパス」の修正例である。ナガラ以外の誤用の部分は、修正されたものを記す。

(38) 私も日本の映画やドラマを見ナガラ (→ているウチニ) 日本の文化や生活が気になってこれをきっかけに、今までこつこつと勉強することができました。(韓国：上級)

(39) 大学の日本研究を行うサークルにはいって、日本のたくさんの大学生と交流しナガラ (→ているウチニ) 自然に日本、あるいは日本に

関する物に興味を持つようになりました。(韓国：中級)

- (40) そして大学1年の冬休みに東京に行ったこともあります。テキストで見たことを実際に見て体験しナガラ (→ているウチニ) 日本という国について沢山の興味がわきました。(韓国：中級)

(38) (39) (40) はいずれもナガラがウチニに修正されている。これらの文でナガラ節と同時に起こる動きは「気になる」「興味を持つ」「興味がわく」である。ナガラの付帯用法は、「主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す」というものであったが、(38) (39) (40) のナガラ節は「同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況」とは言えない。文脈的にウチニの「従属節の表す期間に主節の変化が生じたことを表す」(日本語記述文法研究会 2008 p.189) という用法がふさわしいと判断され、修正されたと考えられる。

一方、(41) はナガラがウチニに修正されているが、これはナガラでも間違いとはいえないのではないだろうか。

- (41) 好きこそ物の上手なれという言葉のとおり、好きな物を見たり、聞いたりしナガラ (→しているウチニ)、より高い段階へ進むことができる。(中国：中級)

(41) のナガラ節では「見たり聞いたり」といった反復動作が継続しており、主節の「進む」と同時に成立していると捉えることができる。ウチニの場合、主節は「高い段階に進む」がひとまとまりの変化として認識されるが、ナガラの場合、徐々に「進む」といった漸進性が際だつ。このような意図で使われていれば、(41) のナガラは誤用だとは言えない。

4-3 ナガラの誤用例：テへの修正

4-3-1 「維持」の局面を持たない動詞+ナガラ

「作文コーパス」に見られるナガラの誤用例 32 例のうち、半数に当たる 16 例がテに修正されている。この修正された誤用例のうち、本節では維持の局面を持たない動詞+ナガラの使用例、次節では、手段を表すテに修正されたナガラについて考察する。

- (42) つぎはテレビを見る時常に電子辞書を持ちナガラ (→手元においテ)、わからない言葉があったらすぐにしらべる事です。

まず、(42) はナガラ節の動詞に問題がある。「持ちナガラ」の用例を

BCCWJで探すと (43) (44) のような付帯用法もあるが、(45) (46) (47) のような逆接の用法のほうが多い。

- (43) この豊後の介が、お隣の幕の近くに寄って来て、召上り物に違いないが、それを載せた角盆を自分で持ちナガラ、豊後介「これは御前にお差上げ下さい。お膳などが揃わなくて、いかにも不体裁ですなあ」というのを右近が聞いて、～ (B)
- (44) わたしは不吉な予感を持ちナガラ、妻をつれて病院にかけつけた。(B)
- (45) 欠けるところのない美貌と教養を持ちナガラ、明石の君は源氏との身分の差を思い煩悶する。(B)
- (46) 歯医者という高度な技術を持ちナガラ、どうしてここまで追い込まれなくてはならなかったのか。(B)
- (47) スタウローギンは、あり余る知力と精力とを持ちナガラ、これを人間侮蔑の為にしか使わなかった。(B)

「持つ」を森山(1988)は「維持」の局面を持つ動詞であるとしている。2-3節で見たようにナガラ節の動詞が結果維持の局面をもつ動詞の場合、ナガラ節は結果維持を表すことができ、ナガラとテは置き換えることができる。このため、「持つ」はナガラでもテでも使うことができることになる。しかし、「辞書を持つ」という表現は「辞書を手に置く」と言ったほうが自然である。この場合、「置く」は「維持」の局面を持たないため、ナガラ節で結果維持を表すことができない。(42)は「電子辞書を手に置いた状態で」という意味で使われているため、ナガラはテに修正される。

4-3-2 手段を表す用法

ナガラからテに修正された例の中で、「手段」の用法とでも呼ぶべき用法がある。「作文コーパス」に収められている作文のテーマが「日本語が上手になる方法」ということもあり、どのような手段で勉強すればよいのかといった文脈でナガラがよく使われている。

通常動作動詞は、「食事をして、出かける」のようにテ節は継起性を表すが、「辞書を使っテ意味を調べた」のような「手段」を表す場合、テ節の動作は時間の幅を持った動きを表し、「使う」と「調べる」は同時に起こっている。付帯状況のナガラ節も主節との同時性を表すため、ナガラと「手段」のテは

同じように使うことができるが、「手段」のテの中にはナガラに置き換えられないものがある。(48)～(51)はテに修正されたナガラの例文である。

- (48) 朝、起きて顔を洗う時、外国人と出会ったと想像して、こえに出しナガラ (→テ) 会話すること。(韓国：中級)
- (49) 本をたくさん読みナガラ (→読んデ) 練習したらだんだん上手になると思います。(韓国：中級)
- (50) 主に大学で専攻している日本語の授業を受けナガラ、家では自分が好きな小説を読みナガラ (→読んデ) しらなかった表現や漢字を覚えた。(韓国：上級)
- (51) 外国語が上手くなるためには、その国の人とよく話しナガラ (→テ)、聞き取りの能力と話す能力を高くすることが第一の方法だと思います。(韓国：初級)

この修正された例を見ると(48)(49)はナガラではなくテの方が自然だが、(50)(51)はナガラを使用してもいいように思われる。また、次のようなナガラは修正されていない。

- (52) 私は日本のドラマを見ナガラ日本語を自分で勉強したので、聞き取りは別に問題なかったが、話すこと、書くことは自信もなくダメだった。(韓国：上級)
- (53) 自分が関心や興味がある外国の映画とかドラマをよく見ナガラ、聞き取りをするのも大切なことだと思います。(韓国：初級)

筆者の語感では(52)のナガラは許容できるが、(53)のナガラは不自然である。このような学習者のナガラ使用を添削する場面に見られる、日本語母語話者の語感の違いはどのように起こるのだろうか。

まず、修正されたものとされなかったものの違いを見るために、手段を表すテについて見てみよう。

- (54) 自転車に {乗っテ／*乗りナガラ}、学校へ行く。
- (55) 何度も {たたいテ／*たたきナガラ} 壊した。
- (56) 難しい漢字を何度も {書いテ／??書きナガラ} 覚える。
- (57) ハリウッド映画を {見テ／見ナガラ} 楽しく英語を学ぶ。
- (54)(55)のテはナガラに置き換えることができないが、(56)(57)は人によっては許容される。

吉永(2008)は「歩いテ帰る」は「歩く」と「帰る」が切り離すことので

きない動きであり、テ節が動詞として、主動詞に完全に一体化しているとする。このため「歩いテ帰る」のテはナガラに置き換えられないという。このことをナガラの用法として考えた場合、ナガラ節の動作は主動詞から独立した動きを保持していなければならないということになる。

この観点から改めて(54)～(57)を見ると、(54)(55)は「乗る・行く」「たたく・壊す」が一体化しているが、(56)(57)の「書く・覚える」「見る・学ぶ」はナガラ節の動作の独立性が残っている。(56)のナガラについては、手段の意味ではなく、何度も書くことと、覚えることが漸進的に進行すると捉えられるため、まったく同じ意味での書き換えはできないという意味解釈の問題も出てくる。

ここでもう一度(48)～(51)を見ると、(48)「声に出す・会話する」(49)「読む・練習する」は一体化しているが、(50)「読む・覚える」(51)「話す・能力を高める」は一体化した動きとは捉えられず、独立性が残っていると考えられる。このため、(50)(51)はナガラの使用が可能だという判断が生じるのではないか。

ところで、従属節の動作と主節の動作が一体化しているかどうかの判断は文脈に負うところが大きい。(57)は「映画を見る」ことが、楽しみであり、勉強にもなるといった文脈で捉えられるため、見ナガラは独立した動きと捉えられ、許容される。一方(58)は、「見る」がくりかえしの動作ではないという条件をつけると、テは自然だが、ナガラは許容度が低くなる。

(58) そのVTRを {見テ / ?? 見ナガラ}、犯人が映っていないか、必死に探した。

(58)は、「見る」と「探す」ことが、一体化した一つの動作と捉えられるため、ナガラの許容度が下がる。では、(53)の「見ナガラ」についてはどうだろう。「ドラマを見る」と「聞き取りをする」が一体化した動きなのか、独立した動きなのか、判断が難しい。

ドラマや映画を「映像+音声+物語」という要素で構成されるものであり、これを受信することを「見る」という動詞で代用していると捉えると、「ドラマを見ながら聞き取りをする」は「音声」の受信が焦点化されていると考えられる。

「音声の受信」をさらに際立たせるために、(53)を次のように書き換えてみる。

(53)' 外国の映画とかドラマを {見テ / *見ナガラ}、一言一句正確に聞き取る。

(53)' ではテは使えるが、ナガラは使えない。その理由は、(53)' では「ドラマを見る」に含まれる「映像+音声+物語」という要素の中の「聞く」が際立ち、主節動詞「聞き取る」と、同じ動作になってしまうからである。ナガラ節と主節の動作が一体化する度合いは、表2のように段階的に高くなり、一体化の度合いが高くなれば、ナガラの許容度は下がる。(53)は(57)と(53)'の中間に位置しており、文脈をどう判断するかによって、人によっては許容し、人によっては許容できないという現象がおこるのではないだろうか。

表2 主節と従属節の動きの一体化の度合い

低い	(57) ハリウッド映画を {見テ / 見ナガラ} 楽しく英語を学ぶ。
↑	(53) 自分が関心や興味がある外国の映画とかドラマを見ナガラ、聞き取りをするのも大切なことだと思います。
↓	(53)' 外国の映画とかドラマを {見テ / *見ナガラ}、一言一句正確に聞き取る。
高い	

以上、4節ではナガラとテの置き換えの可否について、ナガラ・テ節の動詞の種類という観点と、主節とナガラ・テ節の動作の一体化の度合いという観点から分析を試みた。

5. まとめ

本稿では、ナガラとテの置き換えの可否を検証するという方法で、ナガラの用法について分析したが、まとめると、次のようになる。

- ①ナガラ節・テ節が心理作用を表す動詞によって構成される「心的状態」を表す場合、ナガラ・テ節は、置き換えることが可能で(仁田1995)、ともに主体の状態・状況を表す。
- ②主体運動の動詞がナガラ・テ節で繰り返しの事象を表す場合、ナガラとテは置き換えられる(仁田1995)。この場合、ナガラ・テ節は動作継続の局面を表す。
- ③従属節の動詞が[維持]の局面をもつ主体変化動詞の場合、ナガラとテは

置き換えることができる。この場合、ナガラ・テ節は結果維持の局面を表す。

- ④「主体動作動詞+テ」のテ節は動きをひとまとまりのものと捉える完成性を持ち、通常は継起性を表す。この場合、テとナガラは置き換えられない。
- ⑤従属節の動詞が[維持]の局面をもつ客体変化動詞の場合、テは使えるが、ナガラは使うことができない。テ節は「主体の様態的あり方」の度合いが低くても使用可能だが、ナガラは使えないことが、その理由である。
- ⑥主節の動作とナガラ・テ節の動作の一体化の度合いが高くなるにしたがい、テは使えても、ナガラは使えなくなる。

①～④は、「付帯状況ナガラ節は、動作継続の局面か、結果継続を維持する局面を表す」という条件に見合うものであり、テとの置き換えの可否は、テ節が「動作継続」あるいは「結果維持」を表すか否かによって左右されるものである。

一方、⑤⑥はナガラ・テ節のアスペクト的性質に起因するものではなく、語用論的な条件であり、付帯状況ナガラの用法を定義する上で、重要な要素である。⑤⑥から、付帯状況ナガラ節が表す事態は、主体全体に関わる状況であること、加えて、主節の事態とナガラ節の事態は時間的同时性を有するが、一体化したものではなく、独立性を保っていなければならないことが、確認された。「一体化」については、想定される文脈によって、その度合いが高くなったり低くなったりすることがあり、「一体化」の度合いが高いと判断された場合、ナガラの許容度は低くなる。

本稿は「日本語学習者作文コーパス」を利用してナガラの文法的ふるまいについて分析を試みたが、学習者の母語の干渉といった観点からの分析はできなかった。今後は、中国語、韓国語といった、学習者の母語との対照研究もふまえ、さらに考察を深めていきたい。

注

- (1) 川越 (2002) はテに置き換えられないナガラを「付帯状況」の用法、置き換えられるナガラを「様態」の用法とさらに細かく分類しているが、本稿は、非逆接のナガラはすべて付帯状況と捉えている。
- (2) この分類に村木 (2006) は疑問を呈している。村木 (2006) は「同時進行」は主

節と従属節の時間性を問題としているのに対し、「逆接」は主節と従属節の接続関係を問題としていると指摘する。時間性は同時か継起かで対立し、接続関係は順接か逆接かで対立する。つまり、「同時進行」か、「逆接」かという分類には対立する概念軸が設定できないからである。

- (3) 仁田（1995）では本稿でテ、テ形、テ節としているものを、シテ形、シテ節と表記している。ここで「シテ→テ」として、論を進める。
- (4) 例文中の「～」という表記は、「省略」という意味で使われているようである。本稿では、仁田（1995）の例文については、仁田（1995）の表記を踏襲している。
- (5) 韓国語母語話者にナガラの誤用が多い理由として、坂口、鄭（2006）は、日本語のナガラと似ているが、使用範囲の異なる韓国語の「면서」の影響だと指摘している。

引用文献

- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 川越菜穂子（2002）「「ながら」節の用法の記述について—付帯状況・様態・逆接—」『人間文化学部研究年報』（4）p.51 - 62 帝塚山学院大学
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- グループジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 坂口昌子、鄭惠先（2006）「ナガラ節に見られる日本語学習者の母語転移—韓国語母語話者が用いる「ながら」の始点的用法を中心に—」『京都外国語大学研究論叢』LXV Ⅲ号 p.191 - 198
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 仁田義雄（1995）「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（下）』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6』くろしお出版
- 松田真希子（2000）「ナガラ節の状態修飾性をめぐって」『日本語・日本文化研究』10 大阪外国語大学日本語講座 p.37 - 48
- 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 三宅知宏（1999）「日本語の付帯状況文」『国文鶴見』第 34 号 p.84 - 74
- 村木新次郎（2006）「「-ながら」の諸用法」『日本語文法の新地平 3』くろしお出版 p.1 - 24
- 森田良行（1980）『基礎日本語 2』角川書店
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 吉永 尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
- 和田礼子（1998）「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のアスペクトについて」『日本語教育』97 号 p.94 - 105 日本語教育学会
- 和田礼子（2013）「西日本方言話者と東京方言話者の共通語使用場面におけるアスペ

クト認識—同時進行ナガラ節、テルトコ形のアスペクトについて—」『鹿児島大学
留学生センター紀要』第1号 鹿児島大学留学生センター